コミュニティ・スクールで行う
キャリア教育の実践
～交流学習・体験的な学習を通して～

美祢市立伊佐小学校、伊佐中学校

キャリア教育の視点

伊佐中学校区では、交流学習・体験的な学習を通して、キャリア教育の実践を行っています。これらの学習活動では、中１ギャップの解消、コミュニケーション能力の育成、ソーシャルスキルの習得をねらいとしています。

【人間関係形成・社会形成能力】【自己理解・自己管理能力】【キャリアプランニング能力】

交流学習

＜交流学習＞

今年度は１月末に６年生が一日、伊佐中学校で授業を受け、中学校生活を体験する活動を行う。

＜伊佐小中特別支援学級ふれあい交流学習＞

夏休みに、伊佐小中の特別支援学級児童生徒及び卒業生で、伊佐公民館でキャンプを行った。児童生徒がそれぞれの役割を果たしながら楽しく過ごし、保護者の情報交換の場として毎年行っている。

＜伊佐小中合同あいさつ運動＞

１学期と２学期の２週間、伊佐小中合同であいさつ運動を行った。伊佐小学校は登校班ごとに、伊佐小バス停前と学校正門に別れて行った。伊佐中学校は学校正門と地下道前で行った。あいさつ運動を実施する際に、たすきや旗を使用して呼びかけを行った。あいさつ運動を行うことで、校内でのあいさつをする声が大きくなり、自分から積極的にあいさつをする児童も増えた。来年度は、小学校・中学校で登校時刻が違うが、一緒にあいさつ運動をすると、さらに交流を深めることができると考える。

体験学習

＜小学校＞

１　異年齢交流体験学習

目　的

①　異年齢児童との交流を深め、コミュニケーション能力を育成する。

②　自分で責任をもって苗の植え付けから収穫までの活動を行い、最後までやり通そうとする力を育成する。

成　果

年間を通して一人一鉢花を育て、水やりや草取り・花摘みの体験活動を行った。また、縦割班ごとに花壇の世話を担当し、夏休みには登校班ごとに水やりや草取りを行った。こうした体験活動を通して、上学年の児童が苗の植え方や草取りの方法を、下学年の児童に教える姿が見られ、学年を超えて交流を深めることができた。学校

生活でも、学年に関係なく休み時間に遊んだり、困っている児童がいると優しくしたりという姿がよく見られる。さらに、水やりや草取りを一人一人が責任をもって行うことで、綺麗な花を咲かせることができ、達成感を味わった。日頃の係り活動や委員会活動でも自分の役割を責任をもって意欲的に取り組む姿が見られる。以上のことから、この体験活動を通して、学年の枠を超えて人と関わるコミュニケーション能力を高めることができ、さらに、花の世話をすることで最後までやり通そうする素晴らしさを感じることができた。キャリア教育の充実にふさわしい活動であった。

課　題

花の苗植えをするときに、上学年の児童は下学年の児童に植え付けの方法を教えていたが、下学年の児童からわからない所を積極的に聞く姿が少なかったので、活動中に声かけをする必要があった。それぞれの班の花壇や自分の鉢の様子について把握している児童が少なく、草取りや花摘みを自主的にしている児童が少なかった。鉢の様子を定期的に見ることができるような方法を考えていく必要があると考える。

＜中学校＞

１　職場体験学習

目　的

① 職業について正しく知り、働く意義を考える力を育成する。

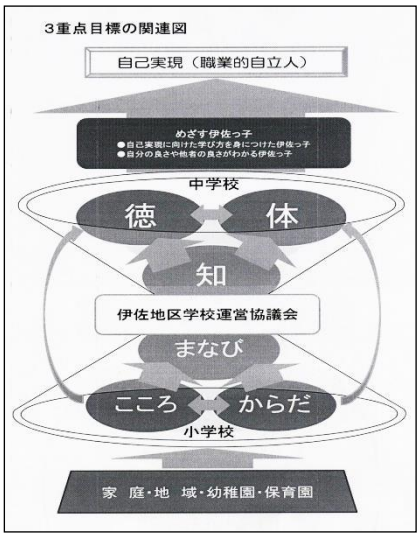
② 自分の将来を考え、物事を社会的な見地（大人目線や常識的な判断など）で幅広く見つめる力を育成する。

③ 社会生活に必要なソーシャルスキル（礼儀やマナーなど）を育成する。

成　果

この体験活動は、１年次３学期より準備を始め、総合的な学習の時間や学級活動の時間を使って、働く意義、いろいろな職業、活動を行いたい事業所選びなど行った。２年次に入って、事前訪問のアポイントメント、事前訪問、体験活動、礼状書き、グループ発表、感想文という流れで計画を立て、実施した。この体験学習を通して、生徒たちは大きな変容が見られた。まず、どの職場もあいさつをすることの大切さを教わり、学校生活でも今まで以上にあいさつがよくなった。次に、職場の環境をきれいにする大切さを学び、学校での清掃活動の大切さがよく理解できた。また言葉遣いやちょっとしたマナーなど様々なことを学び、学校の中でも学んだことを生かしながら生活を送る様子が随所に見られた。生徒たちは、働く意義や働くことの大変さを理解し、この学習がソーシャルスキルの高まりを感じるものとなるなど、当初の目的を達成する活動であり、キャリア教育の充実にふさわしい活動あったと思う。

課　題

基本的に体験する事業所が、伊佐地区を中心とした美祢市ということもあり、職種が限られ、生徒のニーズにそぐわないということもあった。職種や活動地域を幅広くし、生徒のニーズに応えたいところもあるが、生徒の移動手段なども限定され、この課題については、さらに検討の余地がある。また、３日間という限られた時間では、事業所の方とのコミュニケーションや仕事の要領が身につかないまま終わってしまうということもあった。１週間の活動ということも思案されるが、事業所の事情、学校現場の事情等を考えると、この課題についてもなかなか解決の難しい問題である。

全体との関連